

Ⅲ 主な出来事

○さとうきびハカマ（はがら）の有効活用方策の検討を開始

さとうきびのハーベスタ収穫物に混入する原料以外のハカマ等は、デトラッシャー施設で分離され、たい肥の原料として活用されているが、長期間屋外で保管されており、たい肥原料以外の活用が課題となっている。今回、さとうきびほ場への直接還元、畜舎の敷料、園芸・茶の敷草、赤土流出防止として活用できないか検討するため、4月7～8日にかけて、ハカマの圧縮梱包作業を行った。今後、実証成果、運搬・施用の課題等について検証し、実用化の可能性について検討を行う。

○さとうきび製糖終了。生産量は3年ぶりに18万トンを上回る

4月5日、大型工場におけるさとうきび製糖が終了した。今期は、夏場の干ばつや台風の影響もなく順調な生育であったため、前年産に比べ約2.6万トン増の18.4万トンとなった。徳之島で2工場体制を維持するためには18万トン以上の原料を安定的に確保するため、農業普及課としては、関係機関と連携し、ビレットプラントやスクープ等の機械化による省力化の普及を進めるとともに、徳之島さとうきび農作業受委託調整センターの運営強化による適期作業の実施を図っていく。

○令和3年度産トルコギキョウ栽培品種を検討、選定！

4月16日に民間種苗会社の担当者が来島し、徳之島支場や生産者ほ場にて生産者3名と関係機関が品種の検討を行った。島内の品種選定基準やメーカー推奨品種等について意見交換をした。4月21日には徳之島トルコギキョウ組合で品種選定会を開催し、令和2年度栽培品種の生育特性やメーカー品種情報について共有し、令和3年度の栽培品種を選定した。普及課では引き続き、実証や研修会等を通して栽培技術の向上を図り、良品生産を目指していく。

○天城町4Hクラブ員が活動の活性化を図る

4月20日、天城町4Hクラブ定例会が開催された。令和2年度はコロナ禍で活動できなかったが、他地区の活動を参考に「コロナ禍でも令和3年度はできることをしよう！」と活動計画を検討した。保育所との「花いっぱい活動」や農業祭、島外視察研修の充実を図る。また、クラブの活性化のため、クラブ員から共同プロジェクトについて提案があった。詳細は、次回定例会にて検討し、それまでに各自情報収集を行うこととなった。農業普及課では今後も活動支援を続けていく。

○徳之島農業の発展のため普及事業協議会と営農推進本部の協力で一致

4月21日、普及事業協議会と徳之島営農推進本部の総会が開催された。いずれも徳之島3町長をトップに、行政、農協等関係機関が協力し合い、徳之島の農業の発展のために活動することで一致した。特に整備が進む畑かんによる水利用を中心とした農業技術の推進、担い手の育成を重点的に行う事業計画が提案された。出席者から様々な意見等が出され、議案はいずれも承認された。関係者からはこれまでの普及活動の成果への評価も出され、継続的な支援の重要性が再認識できた。

○徳之島地域赤土新ばれいしょ「春一番」出荷終了

JAあまみ徳之島事業本部及び天城事業本部ばれいしょ部会の銘柄「春一番」の出荷が5月上旬に終了した。定植期の干ばつ、12月の寡日照、度重なる強風害で単収が低迷した他、高単価により共販率が低下し、共販数量は4,282トン（前年対比68%）まで落ち込んだ。一方、平均単価が309円/kgと高値で推移したため、共販額は対前年度比124%の13億239百万円となった。産地の維持拡大を図るべく、園振協徳之島支部で連携し、次作の単収向上に向けた栽培講習会を開催予定である。

○今年度の徳之島地区生活研究グループ活動を開始

5月26日に徳之島地区生活研究グループ連絡協議会は総会を開催し、令和3年度の活動をスタートさせた。昨年度は計画した事業の半分しか実施できず、今年度もどうなるかわからない状況ではあるが、コロナウイルス感染対策をしながら「学ぼう伝えよう講座」等の研修会を実施することが承認された。総会後は、開催地の天城町生活研究グループ員が準備したお団子、パイナップル漬けを詰め合わせたお茶請けセットが振る舞われ、参加者を喜ばせた。

○ハカマの敷料利用実証スタート

今年度より徳之島地域総合営農推進本部畜産部会と糖業部会が連携して行う「ハカマの敷料利用」実証試験が5月から始まった。実証農家3戸（1戸は6月以降）の牛舎と5月セリ市での出荷子牛係留牛舎（船積みまでの1週間程度利用）における、敷料としての吸水性や取扱等について状況確認を随時行っている。今のところ、ハカマの水分がノコズ等よりも高いため、日持ちは劣るが利用性はあるという意見が多い。今後、実証農家等の感想・意見を参考に、関係者で検討を行う。

○参画21とくのしま総会及び研修会を開催

6月10日、徳之島の女性農業経営士組織「参画21とくのしま」が総会と研修会を開催し、新年度の活動を開始した。事業計画では、若手女性農業者を交えた研修会や、会員が生産する熱帯果樹をPRするための異業種交流会開催が承認された。また、島内研修はジビエカフェとうぐらを運営する「金見あまちゃんクラブ」、あまみリノベーション株式会社運営の「伝泊徳之島」の宿泊施設、「天城獣肉処理施設山猪工房あまぎ」を視察した。

○畑かんマイスター委嘱状交付式・総会・語る会を開催

6月7日、徳之島地域総合営農推進本部による「畑かんマイスター」への委嘱状交付式が執り行われた。任期は3年間で、更に畑かん推進を強化するため、5人増員し、15人体制となった。畑かんマイスターは、畑地かんがいを利用した先駆的な営農の実践者であり、地域の畑かん営農推進やPR活動などを行う。畑かんマイスターからは力強い抱負の言葉が述べられ、引き続き開催された総会及び行政等関係機関との語る会では、活発な意見交換がなされた。

○今年度の3町新規就農者のほ場巡回

今年度の「新規就農者励ましの会」開催を6月29日に控え、3町の新規就農者巡回を実施した。当日は、農業普及課、各町の担当が新規就農者のほ場や畜舎を訪問し、営農状況を確認しながら課題や悩み、今後の目標等を聞き取り、助言を行うとともに、「新規就農者励ましの会」や7月に開講する「農業基礎講座（全4回）」への出席、農業青年クラブへの加入を声かけした。今年度の対象者は16人となった。

○徳之島町女性起業グループ「子宝島の朋友」第1回総会を開催

6月12日、徳之島町井之川公民館で「子宝島の朋友」が結成後初の総会を開催した。同組織は、昨年5月に徳之島町生活研究グループ員有志が、味噌、つわぶきの佃煮、パイナップル漬け等の加工販売を主に行うため、出資をして結成、活動を開始した任意組織である。今年度は、衛生的な加工工程管理を最重点の行動目標としつつ、徳之島町の補助事業を活用して「なり（ソテツの実からとりだしたでんぷん）味噌」「じゃがいも味噌」を商品化した。

○徳之島農業青年クラブ連絡協議会、総会を開催！

6月29日、JAあまみ徳之島事業本部にて標記会が開催され、クラブ員と関係機関合わせて17名が参加した。今回は、コロナウイルス対策のため規模を縮小し、来賓等を制限しての開催となった。会では、前年度実績や今年度活動計画について議論が交わされた他、平山新会長から今年度の活動に向けた決意表明があった。農業普及課では、指導農業士会、各町及びJA等の関係機関と連携しながら、工夫した活動が実施できるよう重点的な支援を継続していく。

○農業後継者育成について語る～指導農業士会総会を開催～

6月29日、徳之島指導農業士会（会員7人）の総会が開催された。総会では、指導農業士を活用した新規就農者等の研修、新規就農者やプロジェクト実施者への支援等、農業後継者育成のための積極的取組の検討がなされた。また、今年度は、新会員の加入が予定されており、活動の充実を図る検討もなされた。農業普及課としては、現地就農トレーナー設置事業を活用し、指導農業士との連携強化を図る。

○新規就農者励ましの会を開催

徳之島農業改良普及事業協議会と3町担い手育成総合支援協議会が、6月29日に、新規就農者励ましの会をJAあまみ徳之島事業本部で開催した。今年度の対象は、令和2年7月から令和3年6月までに就農した16人で、事前に対象者のほ場巡回を行い、就農状況等を現地確認し、励ましの会の出席督励を行った。当日は関係機関からの励ましの言葉やお祝い品（農業かごしま1年分）の提供、新規就農者支援策の説明を行った。

○マンゴー出発式およびマンゴー目揃い会の開催

7月7日に天城町でマンゴー出発式が開催された。今年は花芽分化が順調で、ここ数年で一番収量が多いと見込まれる。今年は梅雨が長く果皮の着色を心配したが、順調に着色し、昨年より約1週間早い出発式となった。また、7月20日には農協および天城町熱帯果樹生産組合で目揃い会を開催した。生産者と選果者の目を合わせ、より品質のよいものを出荷するための初の取組であった。今後も農業普及課は毎年安定した収量・品質を確保できるような栽培管理を支援していく。

○徳之島トルコギキョウ組合の個別経営検討会を開催

8月6日、役場担当者と農業普及課が徳之島トルコギキョウ組合5名を対象に、個別の経営分析検討会を実施した。トルコギキョウ栽培が開始されて以来、初めての取組だったこともあり、一人一人が自身の経営を見つめ直す良い機会となった。9月末から令和3年産の定植が始まるので、今回の検討会で設定した目標に向けて日々適期作業に努めてほしい。農業普及課では今後も検討会を継続して実施し、組合全体の生産技術の底上げを図り、経営安定を目指す。

○認定農業者等対象の研修会開催

7月28日、伊仙町ほーらい館で徳之島3町の認定農業者と新規就農者を対象に研修会を行い、生産者18名、関係者17名が参加した。内容は（公財）地域振興公社による農地バンク、農業共済組合による収入保険、JAあまみによる青色申告、農業普及課による畑かん事業の紹介、説明であった。台風後の後片付け等の影響もあり、参加者は例年より少なかった。研修に併せて研修内容に関するアンケート調査も行い、貴重な情報として今後の担い手育成に活用したい。

○女性農業経営士組織「参画21とくのしま」が、島内カフェ経営者に熱帯果樹をPR！

7月28日、「参画21とくのしま」は、徳之島リゾートホテル&オフィスにて、島内3町のカフェ経営者8店と島内産熱帯果実及び果実加工品の試食をする異業種交流会を開催した。台風等で出荷できない熱帯果実の販売向上を図るため、果樹会員が生産したマンゴー等とその加工品（冷凍果実、ジュース）の試食、評価をしていただき、意見交換した。異業種交流は初の試みであったが活発な交流ができ、今後もこのような機会をつくりたいと双方とも意欲的であった。

○来年のマンゴーに向けてせん定講習会の開催

7月29、30日に農業開発総合センター大島支場より坂上研究専門員を講師に迎え、マンゴーせん定講習会を行った。講習会は町ごとに行い、生産者44名が参加した。今年のマンゴーは豊作であり、来年に向けた管理が重要になる。果実を収穫した樹は花穂のみを取り除く弱いせん定を行うことを確認した。今作は収穫時期に台風が2回襲来し、船が止まるなどしたが、概ね昨年より収量、売上高ともに増加した。農業普及課では今後も安定したマンゴー生産に向けた支援を行う。

○トランスバーラの実証展示ほど栽培推進中！

徳之島地域総合営農推進本部畜産部会(事務局：農業普及課)では、新産地育成普及活動事業を活用し、永年牧草「トランスバーラ」の栽培推進を図っている。昨年はローズグラスとの混播や畑かんのかん水による増収効果を実証し、事業最終年度の今年は、ロールベラー収穫体系における耐機械踏圧性（対照区は草刈機収穫）を実証中である。7月収穫後の8月26日収量調査では、大型機械収穫体系でも収量減の影響は出ていない。今後も調査を継続し、さらに栽培推進を図る。

○徳之島トルコギキョウ定植が始まる

徳之島では、令和3年度産トルコギキョウの定植が9月中旬から始まり、1月からの出荷を計画している。今年度は6戸の生産者が栽培をしており、個別検討会で設定した目標に向けて各自取り組んでいる。昨年改訂した徳之島版栽培暦を基に計画的な栽培を進め、今年度は特に、適期かん水や病害虫防除を徹底し、収穫本数の大幅アップを目指す。今後農業普及課では、定期的な巡回指導を続け、栽培技術の向上支援を続けていく。

○徳之島産ピタヤの品質向上を目指した取組

東京等で徳之島産ピタヤの評価が高まりつつあるが、果実により食味の較差が大きいいため、今年是非破壊糖度計を導入し、一定品質以上の果実を出荷する取組を関係機関や生産者12名で7月21日に行った。赤、白、ピンクの各果実10個を非破壊糖度計と屈折糖度計で測定し、その差を比較しながら非破壊糖度計での目安を決定した。また、果実の割れが完熟の目安であること、10月8日に開催される「新宿高野」での試食会に向けてさらに高品質生産を目指すことを確認した。

○単収向上を目指してばれいしょ栽培講習会を開催

10月21日及び25日、JAあまみ徳之島ばれいしょ部会及び天城ばれいしょ部会の栽培講習会が3会場に分けて開催され、部会員計219名が参加した。園芸振興協議会徳之島支部で作成した技術資料をJA及び農業普及課で分担して説明し、ドローン防除活用等を通じた病害防除を重点的に呼び掛けた。前作の記録的な高値を受け、単収向上に向けた士気が非常に高まっている。今後も関係機関が連携し、単収及び所得向上に向けた重点的な支援を行っていく。

○島内カフェ経営者へ冷凍マンゴー活用方法をPR

10月5日に、天城町のカフェLRcafeteicoにて、島内産マンゴー100%ジュースの試作・試飲をおこなった。マンゴー出荷は8月中旬で終わっており、現在は一部女性起業者が加工原料として冷凍保管している。今回の試作は、冷凍保管していたマンゴーを自然解凍し、活用した。試飲結果は大変好評であった。カフェ経営者が店内メニューでジュースを提供できれば、マンゴーの周年消費が期待できることから、今後も異業種交流を支援する。

○徳之島高校生にスマート農業の取組を紹介

10月22日、徳之島高校生（総合学科9人）に対し、さとうきびで取り組んでいるKASを用いた農作業受委託調整及びパソコン上で営農管理を行う技術の紹介とドローンを用いた防除の実演を行った。農業普及課からは、さとうきびの課題と解決に向けたスマート農業の活用等について説明した。今後、急速に普及する見込みである管理作業や生育状況のパソコン上で把握する技術やドローン活用技術について、質問等もあり、興味の高さが感じられた。

○畜産部会でトランスバーラ実証ほ現地検討会開催

10月14日、徳之島地域総合営農推進本部畜産部会(事務局：農業普及課)定例会が関係者23名参加のもと行われた。ハーベスタ収穫後にほ場に散在するさとうきびのハカマ（莖葉・鞘頭部）の敷料利用、EBL(牛伝染性リンパ腫)対策等について検討を行った。終了後は、栽培推進中の「トランスバーラ」実証ほの現地検討会を行い、植え付け後1年経過して順調に被覆していること、耐機械踏圧性があることを確認した。今後も関係者で共通認識を図りながら畜産振興を図る。

○徳之島地区青年農業者会議を開催

10月29日、徳之島農業青年クラブ連絡協議会主催の青年農業者会議が徳之島事務所に開催され、関係者含め27名が参加した。青年2名が意見発表を、1名がプロジェクト発表を、1名が農作業管理アプリに関する情報提供を行い、指導農業士、農業経営者クラブ員、女性農業経営士等の先進農家から質問や助言も活発に行われた。今後も関係機関と連携の下、農業青年クラブ活動支援を行い、地域の担い手育成を図っていく。

○徳之島地域赤土新ばれいしょ「春一番」定植開始

令和4年産徳之島地域赤土新ばれいしょ「春一番」の定植が10月から順次開始されている。栽培戸数920戸、面積481haを計画しており、1月中旬以降の出荷を見込む。11月以降の気温が平年より低く推移し、散発的な降雨もあることから、ばれいしょの出芽揃いは全体的に良好であり、計画出荷に向けて定植期の分散が図られているところである。今作では、経済連主体のドローン農薬散布が計画されており、年内に第1回目の散布を実施予定である。

○茶業検討会の開催

10月28日、徳之島茶振興会は徳之島の生産・販売の現状と課題を検討した。島内には「べにふうき」、「サンルーシュ」、「そうふう」が作付けされており、生産量は増加傾向である。茶種は9割が普通煎茶で1割が紅茶・半発酵茶となっている。「べにふうき」の紅茶・半発酵茶は徐々に生産量を増やしつつあり、製造工程での投資が必要である。「サンルーシュ」は植栽後8年経過したが販売先獲得に苦慮している。今後は販路開拓も含めた支援をすることとしている。

○認定農業者等研修会を配信で3会場で開催

11月15日、徳之島営農推進本部担い手部会主催による認定農業者等研修会が開催され、企画・運営の支援を行った。鹿児島県農業経営スペシャリスト2名を招き、「農業における労務管理と社会保険」、「農業の法人化と事業継承」という内容での講演会と、個別相談会を行った。集合研修となる講演会は、参加者の利便性と新型コロナウイルス感染症対策を考慮して、天城町役場会場で行い、徳之島町と伊仙町の参加者は、各町の会場でインターネット生配信を視聴する形で参加した。

○第1回葉物類栽培研修会を開催

11月24日、徳之島町展示ほ場において葉物類栽培研修会を開催した。令和元年から試作導入が始まり、今回初めて生産者と関係機関が一同に集まる場となり、計16名の出席となった。はじめに葉物類の需要と産地化について八丈島や種子島の事例を交えて説明をし、実際に種子島産のフェニックスロベレニーやレザーリーフファンを見ながら基本的な栽培や病害虫防除について確認をした。今後は他産地の取組も参考にし、新たな産地づくりを関係機関と連携して行っていく。

○徳之島高等学校畑かん営農講座を開催

11月17日、徳之島高校と徳之島地域総合営農推進本部が主催の畑かん営農講座が開催され、総合学科生物生産系列の生徒7名が受講した。徳之島ダムやほ場整備工事の見学や、かん水効果等についての室内講座、畑かん散水器具の操作体験を行った。生徒からは「畑かんでこんなに収量や収益に差が出ることは知らなかった」「将来農家を目指しているので、畑かんは本当に必要だと思った」などの声が聞かれ、畑かんの重要性について理解を深める良い機会となった。

○徳之島ピタヤの産地化に向けた取組

11月22日にピタヤ出荷反省会が開催され、生産者3名が参加した。徳之島のピタヤは評価が高く、需要が高まっているが、生産量が足りない状況である。農協が出荷できるピタヤはピタヤ研究会員6名で選抜したピタヤ系統に限定されている。今後は生産量を拡大するために、ピタヤ系統の商標の決定、登録、研究会規約の作成および苗の増殖を行い、生産者を増やすことに合意した。農業普及課では今後も産地育成のために支援を行う。

○OKSASを活用した効率的な受託調整を進めるための研修を実施

11月5日、徳之島さとうきび生産対策本部はさとうきび関係機関及び生産者代表を対象に徳之島におけるK S A S活用について研修を行った。当日はK S A S開発元のクボタの技術者から説明を受けた上で活用方法について意見交換を実施した。徳之島では効率的な受委託調整だけでなくほ場台帳整備によるさとうきび情報の一元化・有効活用にもK S A Sを利用する取組を進めておりクボタも注目している。より高度な活用法の可能性について関係者の認識が高まった研修となった。

○徳之島農業経営者クラブ徳之島農業を語る会を開催

11月26日、徳之島農業経営者クラブは指導農業士会、参画21とくのみま、農業青年クラブと共催で「第1回徳之島農業を語る会」を開催した。各団体が提起した島の農業の現状と課題について、徳之島3町の町長をはじめ農政、耕地、農業委員会代表者らと意見交換した。畑かんを活用した農業振興、新規就農者等の研修体系、女性農業者の労力軽減と地域活性化、担い手の確保について意見交換され、町長から本検討会を毎年開催してほしいと要望されるほど盛り上がった。

○営農技術・経営研修会を開催

11月30日、徳之島地域総合営農推進本部・徳之島農業改良普及事業協議会が主催する標記会が徳之島町文化会館において開催され、農業者を中心に103名が参加した。有望品目「エダマメ」の栽培、さとうきびの農作業受委託調整、畑かん利用による収益性の向上等について発表がなされ、畑かんを生かした農業生産への理解を深める貴重な機会となった。参加者からは「有望品目に取り組みたい」「畑かん導入によるメリットは大きい」など数多くの反響が寄せられた。

○さとうきびハーベスタオペレータ研修会・さとうきび栽培研修会を開催

11月30日に、ハーベスタオペレータ及びさとうきび栽培研修会が開催された（さとうきび生産対策本部主催、120人出席）。オペレータ研修では、作業時の農作業安全、始業前終業後点検について、栽培研修会では小型トラクタ作業体系に適したうね幅と収量性、ギニアグラス防除対策について研修が行われた。農業普及課としても、本栽培研修会を試験研究成果の紹介の場として位置づけており、現地展示ほ等を設置しながら新技術の普及を図っていく。

○徳之島地域赤土新ばれいしょ「春一番」出発式を開催

1月30日、JA徳之島事業本部において、生産者と関係機関計約80人が参加し、出発式が開催された。県徳之島事務所長からK-GAP認証書が授与されたほか、東京及び名古屋の市場関係者とリモートにて中継し、会場と意見交換を行った。今作は全国他産地の出荷量減少を受け、販売価格が上向きである。参加者全員が共販目標「1万t、20億円」達成に向けて、「がんばろう3唱」を行った。今後も「春一番」の品質及びブランド向上に向けた各種支援を展開する。

○新型コロナ感染予防対策をしながらマンゴー研修会を開催

1月18、19日に島内3町の各マンゴーハウスでマンゴー研修会を検温、消毒の徹底、体調、マスクの有無を確認し、参加名簿を作成して開催した。今年度は秋冬期の気温が低く推移していることから、どの園も十分花芽分化しており、12月に花芽伸長が見られた園もあった。花芽伸長の早い園では1月上旬をめぐりに花芽除去を行ったところである。今年度もマンゴーの着果数が十分あると考えられるため、無胚果を作らないよう注意を喚起した。

○新型コロナ感染予防対策をしながらたんかん幼木研修会開催

1月21日に島内3町のたんかん生産者を対象に、現地でたんかん幼木研修会を検温、消毒の徹底、体調、マスクの有無を確認し、参加名簿を作成して開催した。たんかんの植え付け、幼木時のせん定、施肥および病害虫防除について説明を行った。参加者から質問も多くあり、基本的な内容の大事さを感じる研修会もとなった。

○徳之島花き研究会現地検討会を開催！

1月27日、徳之島町の花き生産者ほ場にて、徳之島花き研究会主催の現地検討会が開催され、生産者8名が出席した。検温や消毒、マスク着用などのコロナウイルス感染防止対策を十分に行い実施した。現地では、レザーリーフファン視察研修報告やトルコギキョウ自家育苗実証の経過、グラジオラス栽培等について、生産者が中心に説明した。今回の研修会では、若手の出席があり、研究会活動の活性化にもつながった。引き続き、関係機関と連携し、花き生産推進を図っていく。

○さとうきびトラッシュの新たな活用先を検討

徳之島さとうきび生産対策本部では、さとうきびのハカマ等（トラッシュ）の新たな活用の検討を進めている。4月に、ハカマを梱包し畜産農家等に提供する取組を行ったが、屋外に一時保管されていたため、水分含量が高い状態ですでに腐熟が進みつつあった。実証農家から、収穫直後の水分を含まないトラッシュの提供の要望が高かったことから、12月20日、再度ハカマ梱包を行い、実証農家に提供した。今後、実証結果を取りまとめ、普及性について検討する。

○徳之島牛の知名度向上！

徳之島町が令和2年度から取り組んでいる、町内産子牛の肥育実証事業（3農家へ2頭ずつ委託し、経済連の肥育マニュアルを基に、地元の糖蜜やミカンの絞り粕を添加した飼料を給与し本土に出荷）で、昨年11月の初出荷2頭に続き、12月出荷の2頭もA5ランクであった。平均成績は、出荷月齢27.3ヶ月、枝肉重量520kg、BMSNO8.3。出荷まで大きなトラブルもなく、初の肥育の試みで、徳之島牛の資質の高さを証明できたことに、支援した関係者も喜んでいる。